

大学生における家族との関係が自己肯定感に与える影響 ～家族の仲の良さ、及び養育者のネガティブ発言に着目して～

The influence of family relationships on self-esteem among university students ～Focusing on the closeness of family relationships and negative remarks from caregivers～

廣崎 陽*・木俣さら**

キーワード：自己肯定感、家族特性、養育態度、親のネガティブ発言

1. 問題と目的

1. 1. 自己肯定感の低下と家庭環境

教育現場において、日本人の「自己肯定感」の低下についての課題が挙げられ久しい。大学生においても、教員や友人の言葉に傷つきやすく、自信を失ったり、やる気が低下したり、対人恐怖を訴えたりするケースが多く感じる。学校教育において、過去、集団教育に重点を置き、創造性や自己表現といった「個性・自分らしさ」を発揮することを後回しにした、学力偏重、競争で優位に立つことに価値観を置いた環境の中で、他者の目や価値基準に依存する傾向が高まり、「社会の要請」に応えられない子どもたちは自己評価が下がりやすく、傷つき、不安が高い状態に陥ってきたと考えられる。

過去の様々な調査における日本と諸外国との比較から、子供たちの自己肯定感は諸外国と比べて低いという結果が示され、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善を推進する取組を進めていくこと求められているとし(文部科学省, 2017)、教育改革が行われてきた。こども家庭庁(2023)の調査では、平成30年度調査と比較すると、「私は、自分自身に満足している」に対し「そう思う」と答えた割合が12.3ポイント、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」においては10.8ポイント高くなっており、また、「自分は役に立たないと強く感じる」に対して「そう思う」と答えた割合は5.7ポイント低くなっていること

を報告している。一方で、同調査では、「そう思う」と答えた者はそれぞれ16.9%、17.9%、15.2%であり、自己肯定感を支える要因の一つといえる他者からの受容感を示す項目である「自分の親(保護者)から愛されている(大切にされている)と思う」に対しては「どちらかといえばそう思う」を含めると80.8%であるが、「そう思う」に関しては38.0%にとどまっており、やはり諸外国と比べ低くなっている。

文部科学省(2017)は、自己肯定感について、勉強やスポーツ等を通じて他者と競い合うなど、自らの力の向上に向けて努力することで得られる達成感や他者からの評価等を通じて育まれる自己肯定感と、自らのアイデンティティに目を向け、自分の長所のみならず短所を含めた自分らしさや個性を冷静に受け止めることで身に付けられる自己肯定感の二つの側面から捉えることが考えられると述べており、2022年に改定された生徒指導提要の中でも、生徒指導の定義の中の文言としても明記されている「自分らしさ」の追求に加え、過去重視されてきたものとは異なる、集団の中の個としての自己を理解すべく他者からの評価の観点が必要と考えられる。また、文部科学省(2017)の報告の中で、家庭、保護者の関わりについて、「家の人にはほめられる」と感じている子供たちの方が、「自分には自分らしさがある」と思っている、また、「親から愛されている(大切にされている)」と思う子供たちの方が、「長所がある」、「家庭生活への満足度」に

*名古屋芸術大学教育学部

**名古屋芸術大学人間発達学部子ども発達学科

関する意識が高いと述べられており、周りからの評価の中でも家族からの評価は自己肯定感に大きな影響を及ぼすと考えられる。

1. 2. 自己肯定感と家族関係についての先行研究

そもそも「自己肯定感」とは、高垣忠一郎氏によって提唱された「自分が自分であって大丈夫」という感覚のことである。高垣（2009）は、「自己肯定感」について、「自己有用感」や「自己効力感」では説明が不十分であり、そのような機能レベルの肯定ではなく「存在レベル」で自己を肯定する意味で用い、失敗をしたときに相手の訴えをしっかり受けとめ、理解したという「理解」と「赦し」によって、存在そのものを肯定する「迷惑を掛ける存在だけど、存在しているいいのだ」という安心感が感じられる性質のものであると述べている。

提唱者である高垣氏の「自己肯定感」が表すそもそもの意味としての『「自分が自分であって大丈夫」という『安心基地』』（高垣，2009）については、1951年にボウルビィ（Bowlby, J.）が「Maternal Care and Mental Health」の中で提唱した愛着理論や、1950年にエリクソン（Erikson, E. H.）が提唱した漸成的発達理論によって説明される乳児期における母親、または養育者との社会相互作用によって支えられていると考えられる。漸成的発達理論における乳児期の発達課題として挙げられている「基本的信頼」は、それが獲得されると、世界が安全で信頼できる場所であると感じるようになり、その後他人と健全な関係を築いて社会生活を送っていく上で重要であると考えられ、幼児期以降の発達を支える概念として知られている。田名場他（2000）は自分自身の安心感と対人関係との関連を基本的信頼感の観点から検討し、発達の初期にその源泉を持つ「基本的信頼感」についての結果に性差が見られず、極めて本質的なものであることを示唆し、青年期において「基本的信頼感」が「対人的信頼感」と有意な正の相関があり、「対人回避傾向」と有意な負の相関があること、さらに自殺を考えたことの

ある人は、考えたことのない人と比較すると、基本的信頼感が低く、対人的信頼感が低く、時間的展望が低く、対人回避傾向が強いことを明らかにしている。

一方で、管見によると基本的信頼感と自己肯定感の関連についての研究は見られない。基本的信頼感という概念に近い研究としては、親への信頼、親・家族との関係を要因とした自己肯定感に関する研究がある。

郭芳他（2018）は、中学生および保護者を対象にアンケート調査を行い、子どもの自己肯定感に及ぼす要因を検証している。その結果、「親・親戚との関係」「学校での生活」「友人の有無」が自己肯定感に影響を及ぼし、その程度については、「親・親戚との関係」のなかでも「親への信頼」、学校生活のなかでも「学校生活享受感」や「学業満足感」、「友人の多さ」などがとりわけ重要であることを明らかにしている。さらに、男子生徒にとっては親との関係性、親と過ごす時間、親の干渉、親戚との関係など全般的な親・親戚関係が影響するのに対し、女子生徒にとっては尊敬できる親であることや、親が自分を大事にしてくれていると感じられることが他の事柄よりも重要であるといった性差が存在することも明らかとなった。

また、家族関係に関しては、吉田（2022）は、自己肯定感に近い概念である「自尊感情」に着目をし、大学生を対象に「褒め」・「叱り」・「見守り」といった親の養育態度が個人の内的作業モデルを媒介し、自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討し、その結果、自尊感情得点が最も高かったのは「見守り」であり、最も低かったのは「叱り」であること、また親の養育態度得点が低いほど、「親密性の回避」得点が高く、「自尊感情」得点も低い傾向があることを明らかにしている。

伊藤（2019）は自尊感情の低下について、思春期における自己意識の高まりや要因の一つと捉え、この時期には、友人や親、教員という重要な他者のまなざしを介して自分を眺めると表現し、揺れる思春期の自分で作り出した「その人」のもつ自己像が気

分によって変化し、一度自己評価が下がると悪い方向に思考が方向づけられます。自己評価を下げるといったメカニズムについて述べている。自己評価と自身がとらえる他者からの評価が自尊感情に影響を与えるのであれば、自尊感情の低下が自己評価を伴う自己肯定感も低下する可能性があるといえよう。

以上みてきたように、基本的信頼感と自己肯定感との関連については、家族関係との関連での研究が多く、性差があることがわかった。一方で、基本的信頼感は素より、家族との関係が直接「自己肯定感」を低下させることに焦点を当てた研究は見当たらない。関連する研究としては、自己肯定感の低下を彷彿させる「自己卑下呈示」の研究がある。野沢（2023）が養育者の子どもを否定するような「身内卑下呈示」が、子どもの自信を奪うことに繋がる可能性を示唆している。ここでいう身内卑下呈示とは、養育者が子どものことを卑下するような言動のことを指し、児童を対象に、養育者が行う子どもを卑下する身内卑下呈示と子どもの自己の強みへの注目との関連について質問紙調査を行った結果、養育者の身内卑下呈示が子どもの自己の強みへの注目と負の関連があることを明らかにしている。

このことから、親や養育者が身内卑下のようなネガティブな内容を口にしたり、ネガティブな空間を作り出したりすることが、子どもの自己肯定感を下げる要因に繋がる可能性が考えられる。すなわち、親子の関わりとして、ネガティブな言葉が飛び交う、また直接的・間接的に問わずネガティブな言葉を浴びせられる状況が自己肯定感を低下させると想定される。

このように、自己肯定感と家族関係に関する先行研究からは、直接の因果関係を明らかにしたものは少なく、多くは近い概念で扱われ、対象も児童から大学生まで多岐にわたり、特にどのような家族関係が自己肯定感に負の影響を及ぼすかは明らかにされていないことがわかった。

1. 3. 本研究の目的

以上のことから、本研究の目的は、大学生における家族との関係が自己肯定感に与える影響を明らかにすることとする。家族との関係に関しては「本人と家族の仲の良さ/悪さ」、そして家庭の環境に関しては「家族特性」、家庭における子への関わりは「養育態度」、さらに「身内卑下呈示」をより具体的なものにするため、親から子へのネガティブな発言に着目した。

なお、高垣（2009）は「自己肯定感」について、「自己有用感」や「自己効力感」では説明が不十分であるとし、「自己の否定的な側面も含め肯定しており、ありのままの自分を受け止め、自分はこの世の中で役に立っている、自分が自分であっても大丈夫、という感覚」と定義している。それを本研究における「自己肯定感」の定義として適用した。

2. 方法

2. 1. 調査協力者

東海地方の大学生の男女 162 名の協力を得た。このうち、同意を得られなかった 1 名を除いた 161 名（男性：46 名、女性 115 名、その他 0 名、性別未回答 0 名）を分析対象とした。分析対象者の対象年齢は、19.2 歳（SD = 2.25）であった。なお、年齢が欠損値であった分析対象者が 1 名存在した。

2. 2. 本調査における尺度構成

2. 2. 1. 家族構成

家族構成について、「あなたの家族構成について教えてください。一人暮らしの方は帰省先（ご実家）の家族構成をお答えください。（複数回答可）」と教示し、複数の選択肢から該当するものに回答を求めた。選択肢は、祖父・祖母・父・母・兄・姉・弟・妹・その他（自由記述）の 9 項目であった。選択肢のそれぞれについて、選択があった場合は「1」で、選択がなかった場合は「0」でコーディングした。

2. 2. 2. 家族との仲のよさ

仲のよい家族について、「あなたと仲のよい家族を教えてください。（複数回答可）」と教示し、複数の選択肢から該当するものに回答を求めた。選択肢は、祖父・祖母・父・母・兄・姉・弟・妹・その他（自由記述）の9項目であった。選択肢のそれぞれについて、選択があった場合は「1」で、選択がなかった場合は「0」でコーディングした。

仲のよくない家族について、「あなたと仲のよくない家族を教えてください。」と教示し、複数の選択肢から該当するものに回答を求めた。選択肢は、祖父・祖母・父・母・兄・姉・弟・妹・その他（自由記述）の9項目であった。選択肢のそれぞれについて、選択があった場合は「1」で、選択がなかった場合は「0」でコーディングした。

2. 2. 3. 家庭の環境

家庭環境は、日本における家族特性評価尺度（杭瀬・三澤，2003）を使用した。尺度の項目数は26項目であり、「1. あてはまらない」から「7. あてはまる」までの7件法で回答を求めた。「家族特性」全体は、26項目すべてを用いて尺度得点を得た。また、「家族特性」の5つの下位因子については、「円満」は6項目、「情緒的結合」は6項目、「共同活動」は4項目、「規律」は5項目、「自立」は5項目をそれぞれ用いて尺度得点を得た。「円満」の項目例としては、「私の家族は明るい雰囲気を持っている」、「家族とのコミュニケーションがいつも取れる」等がある。情緒的結合の項目例としては、「家族内で必要なときに適切な助言・援助が得られる」、「言葉に出さなくても思いが通じることがある」等がある。共同活動の項目例としては、「家族で外出することがある」、「家族みんなで食事をする」等がある。「規律」の項目例としては、「家事を分担しておこなっている」、「私の家は家庭内でルールがある」等がある。自立の項目例としては、「家族がお互いに束縛し合わない」、「私の家は家庭内でルールがある」等がある。

2. 2. 4. 親の養育態度

親の養育態度については、内海（2013）による青年期養育尺度（Development of the Parenting in Adolescence Scale: PAS）を使用した。尺度の項目数は15項目であり、「1. 全くあてはまらない」から「7. 非常によくあてはまる」までの7件法で回答を求めた。「PAS」は全15項目を用いて尺度得点を得た。「PAS」の3つの下位因子に関して、「受容」は6項目、「心理的統制」は6項目、「モニタリング」は3項目をそれぞれ用いて尺度得点を得た。「受容」の項目例としては、「親の人生にとってわたしがたいせつだという感じをうける」、「わたしが悲しんでいるときには、げんきづけてくれる」等がある。「心理的統制」の項目例としては、「わたしのすることは、なんでも親の考えどおりにさせようとする」、「わたしが親とちがったもののみかたをすると、あいそが悪くなる」等がある。「モニタリング」の項目例としては、「ふだんの活動について私と話し合う」、「わたしが外出するとき行き先や誰と一緒に知っている」等がある。

2. 2. 5. 自己肯定感

自己肯定感に関しては、久芳・齊藤・小林（2007）の自己肯定感尺度を参考に、尺度項目8項目の内6項目を採用し、オリジナル項目5項目を加えた計11項目を使用した。「自己肯定感」尺度は本来8項目であるが、中学生向けの尺度であり、大学生の自己肯定感を測定するには不適切であると考えたため、「運動ができる」「成績がいい」この2つの項目は除外した。また、オリジナル項目については、本論文の定義に則して、「ものごとに自信を持って取り組むことができる」「自分は誰かに必要とされていると感じる」「誰かに嫌われていても、自分らしくあってよいと思える」「自分の嫌いなところも含めて自分だと思える」「人の功績を素直に認めることができる」の5項目を設定した。自己肯定感全体は全11項目を用いて尺度得点を得た。また、自己肯定感尺度に関しては、久芳他（2007）とオリジ

ナル項目を足し合わせたものであるため、信頼性を確かめるため因子分析を行った結果、「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」の3因子構造であることがわかった。各下位因子の項目例について、「自尊心」は「今の自分が好きだ」、「自己効力感」は「自分は誰かに必要とされていると感じる」、「劣等感のなさ」は「誰かに嫌われていても、自分らしくあってよいと思える」等である。

2. 2. 6. ネガティブ発言

ネガティブ発言は、第2筆者が独自に作成した12項目を4件法で使用した。親のネガティブな発言の例として、「あなたには似合わない」「そんなことをしても無駄だ」といった行動に対する否定の言葉、「○○はそんなことしなかった」「あなたは頭が悪い」といった他人と比較するような否定的な言葉、「バカ・アホ」「あなたには価値がない」といった人格を否定する言葉、「居なくなってほしい」「あなたを産まなければよかった」といった存在を否定する言葉、「あなたの友達はセンスが悪い」「その音楽は趣味が悪い」といった自分の大事にしているものを否定する言葉、「早く○○しなさい」「あなたは○○にしなさい」といった統制的な言葉などを想定し、それぞれ2項目ずつ12項目とした。ネガティブ発言全体は12項目を用いて尺度得点を得た。ネガティブ発言の6つの下位因子はそれぞれ2項目ずつを用いて尺度得点を得た。

2. 3. 手続き

調査は大学の講義終了後に、調査協力者に対し、調査についての説明資料を配布し、調査概要や倫理的配慮の説明を行った。説明の後、調査に協力する意思があるものに対してGoogleフォームの回答に協力を求めた。

2. 4. 倫理的配慮

研究依頼用紙の1枚目に、1.学籍番号、氏名等の個人を特定できる情報は収集していないこと、

2.分析前のデータが外部に出ることはないこと、
3.研究に協力になくとも、回答の途中で協力を辞退されても不利益を被ることはないことを明記し、Googleフォームの1問目に設けた同意項目において「研究代表者から十分な説明があった上で調査に同意する。」にチェックを入れられた回答のみを分析に使用するといった倫理的配慮を行った。

2. 5. 分析ツール

分析にはjamovi-2.3.28.0-win64を使用した。

3. 結果

3. 1. 因子分析

自己肯定感尺度の因子構造を明らかにするために、因子分析（最尤法・オブリミン回転）を実施した。いずれの因子に対しても負荷量が.40未満である項目および、複数の因子に重複して.40以上の負荷量を示した項目、どの因子にも属さない項目を除外し、項目選定を行った。その結果、固有値1.0以上を示す解釈可能な因子が3因子抽出された。それぞれの因子に対する負荷量は.40以上であり、3因子8項目で構成された。（Table 1）

Table1 自己肯定感尺度の因子分析

	因子			
	1	2	3	独自性
自分には良いところがある	.263	.456	.157	.409
容姿に満足している	-.079	.785	.034	.438
今の自分が好きだ	.072	.778	-.032	.337
自分には誰にも負けないもの(こと)がある	.832	.045	-.083	.314
ものごとに自信を持って取り組むことができる	.736	-.052	.114	.426
自分は誰かに必要とされていると感じる	.500	.122	.116	.565
誰かに嫌われていても、自分らしくあってよいと	.023	.030	.731	.423
人の功績を素直に認めることができる	-.026	-.012	.622	.635
人には好かれる方だ				
自分には「自分らしさ」というものがある				
自分の嫌いなところも含めて自分だと思える				

第1因子は、「自分は誰かに必要とされていると感じる」などの3項目から構成され、自分に自信があり、自分ならできると信じているといった内容のため、「自己効力感」と命名した($\alpha = .78$)。第2因子は、「人には好かれる方だ」などの3項目から構成され、自分の価値について自信をもって認識しているといった内容のため、「自尊心」と命名した($\alpha = .80$)。第3因子は、「誰かに嫌われていても、自分らしくあつてよいと思える」などの2項目から構成され、他人と自分の軸を分けて考えており、自己評価が安定しているといった内容のため

「劣等感のなさ」と命名した($\alpha = .61$)。

3. 2. 各尺度の基礎統計量と内的一貫性の確認

各尺度の基礎統計量と信頼性係数の算出を行った。その結果をTable2に示した。基礎統計量については、いずれの変数についても天井効果と床効果は確認されなかった。また、各尺度・各項目のSDは1.00を超えるものが多かった。 α 係数については、「劣等感のなさ」が $\alpha = .69$ であり、その他の変数は $\alpha s = .78-.87$ で良好であった。

Table2 記述統計

	N	欠損 値	平均 値	中 央 値	標準 偏差	最 小 値	最 大 値	α
性別	161	0	1.71	2	0.45	1	2	
年齢	160	1	19.2	19	2.25	18	43	
家族構成	161	0	3.52	3	1.1	1	8	
家族構成_祖父	161	0	0.18	0	0.39	0	1	
家族構成_祖母	161	0	0.26	0	0.44	0	1	
家族構成_父	161	0	0.9	1	0.3	0	1	
家族構成_母	161	0	0.96	1	0.2	0	1	
家族構成_兄	161	0	0.21	0	0.41	0	1	
家族構成_姉	161	0	0.27	0	0.45	0	1	
家族構成_弟	161	0	0.37	0	0.48	0	1	
家族構成_妹	161	0	0.32	0	0.47	0	1	
家族構成_その他	161	0	0.04	0	0.23	0	2	
仲のよい家族_いない	160	1	0.01	0	0.11	0	1	
仲のよい家族の数	160	1	2.58	3	1.39	0	8	
仲のよい家族の比率	160	1	0.79	0.8	0.55	0	5	
仲のよい家族_祖父	160	1	0.16	0	0.36	0	1	
仲のよい家族_祖母	160	1	0.24	0	0.43	0	1	
仲のよい家族_父	160	1	0.54	1	0.5	0	1	
仲のよい家族_母	160	1	0.81	1	0.4	0	1	
仲のよい家族_兄	160	1	0.11	0	0.32	0	1	
仲のよい家族_姉	160	1	0.24	0	0.43	0	1	
仲のよい家族_弟	160	1	0.26	0	0.44	0	1	
仲のよい家族_妹	160	1	0.22	0	0.41	0	1	
仲のよい家族_その他	160	1	0.01	0	0.08	0	1	

Table2 記述統計（続き）

	N	欠損値	平均値	中央値	標準偏差	最小値	最大値	α
仲のよくない家族の数	129	32	0.61	0	0.76	0	3	
仲のよくない家族の比率	129	32	0.19	0	0.27	0	2	
仲のよくない家族_祖父	129	32	0.05	0	0.21	0	1	
仲のよくない家族_祖母	129	32	0.06	0	0.24	0	1	
仲のよくない家族_父	129	32	0.22	0	0.42	0	1	
仲のよくない家族_母	129	32	0.05	0	0.21	0	1	
仲のよくない家族_兄	130	31	0.08	0	0.27	0	1	
仲のよくない家族_姉	129	32	0.05	0	0.23	0	1	
仲のよくない家族_弟	129	32	0.05	0	0.21	0	1	
仲のよくない家族_妹	129	32	0.05	0	0.21	0	1	
仲のよくない家族_その他	129	32	0.02	0	0.12	0	1	
自己肯定感	158	3	3.45	3.5	0.8	1	5	.85
自尊心	160	1	3.4	3.3	0.99	1	5	.80
自己効力感	161	0	3.11	3	1.05	1	5	.78
劣等感のなさ	159	2	3.78	4	0.95	1	5	.61
家族特性	156	5	4.89	4.9	1.13	2	7	
家族特性_円満	160	1	5.32	5.7	1.47	1	7	
家族特性_情緒的結合	160	1	4.9	5.2	1.54	2	7	
家族特性_共同活動	160	1	5.36	5.8	1.52	1	7	
家族特性_規律	160	1	4.03	4	1.16	1	7	
家族特性_自立	160	1	4.95	5	1.08	2	7	
PAS	158	3	5.07	5.2	1.12	1	7	
PAS_受容	159	2	5.25	5.3	1.39	1	7	
PAS_心理的統制	160	1	2.9	2.8	1.58	1	7	
PAS_モニタリング	161	0	4.9	5	1.54	1	7	
ネガティブ発言	161	0	1.95	1.7	0.9	1	5	

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3. 3. 相関分析

「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」、「仲のよい家族」と「仲のよくない家族」の各変数との関連を検討するため各因子、下位因子間の相関分析を行った。

3. 3. 1. 「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」の各下位因子、「ネガティブ発言」との間の相関

「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」の各下位尺度、「ネガティブ発言」の間の相関係数を算出した。(Table3) 家族特性に関しては、「家族特性」($r = .43, p < .001$)、「家族特性_円満」($r = .30, p < .001$)、「家族特性_情緒的結合」($r = .49, p < .001$)、「家族特性_共同活動」($r = .27, p < .001$)、「家族特性_規律」($r = .36, p < .001$)、「家族特性_自立」($r = .37, p < .001$)と正の相関がみられた。「PAS」については、「PAS」($r = .37, p < .001$)「PAS_受容」($r = .46, p < .001$)、「PAS_モニタリング」($r = .24, p < .01$)との間に中程度の有意な正の相関が見られ、「PAS_心理的統制」($r = -.18, p < .05$)、そして「ネガティブ発言」($r = -.37, p < .001$)との間に有意な負の相関がみられた。

3. 3. 2. 「自己肯定感」の下位因子と「家族特性」、「PAS」の各下位因子、「ネガティブ発言」との間の相関

「自己肯定感」の下位因子「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」の各下位因子との間の相関関係を算出した。(Table3)

3. 3. 2. 1. 「自尊心」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」の相関

「自尊心」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」の各下位因子間の相関係数を算出した。家族特性に関しては、「家族特性」($r = .36, p < .001$)、「家族特性_円満」($r = .25, p < .01$)、

「家族特性_情緒的結合」($r = .43, p < .001$)、「家族特性_共同活動」($r = .19, p < .05$)、「家族特性_規律」($r = .28, p < .001$)、「家族特性_自立」($r = .35, p < .001$)との間に有意な正の相関がみられた。「PAS」については、「PAS」($r = .28, p < .001$)、「PAS_受容」($r = .39, p < .001$)、「PAS_モニタリング」($r = .20, p < .01$)との間に有意な正の相関がみられ、「PAS_心理的統制」との間には、有意な相関は見られなかった。一方で、「ネガティブ発言」($r = -.32, p < .001$)の間には、有意な負の相関がみられた。

3. 3. 2. 2. 「自己効力感」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」の相関

「自己効力感」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」の各下位尺度間の相関係数を算出した。家族特性に関しては、「家族特性」($r = .38, p < .001$)、「家族特性_円満」($r = .25, p < .01$)、「家族特性_情緒的結合」($r = .41, p < .001$)、「家族特性_共同活動」($r = .22, p < .01$)、「家族特性_規律」($r = .38, p < .001$)、「家族特性_自立」($r = .31, p < .001$)と正の相関がみられた。「PAS」については、「PAS」($r = .32, p < .001$)、「PAS_受容」($r = .37, p < .001$)、「PAS_モニタリング」($r = .24, p < .01$)との間に有意な正の相関がみられ、「PAS_心理的統制」との間には有意な相関は見られなかった。一方で、「ネガティブ発言」($r = -.29, p < .001$)の間には、有意な負の相関がみられた。

3. 3. 2. 3. 「劣等感のなさ」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」の相関

「劣等感のなさ」と「家族特性」、「PAS」の各下位尺度、また「ネガティブ発言」との間の相関係数を算出した。家族特性に関しては、「家族特性」($r = .33, p < .001$)、「家族特性_円満」($r = .25, p < .01$)、「家族特性_情緒的結合」($r = .32, p < .001$)、「家族特性_共同活動」($r = .26, p < .01$)、

「家族特性_規律」 ($r = .28, p < .001$)、「家族特性_自立」 ($r = .27, p < .001$) と正の相関がみられた。「PAS」については、「PAS」 ($r = .35, p < .001$)、「PAS_受容」 ($r = .36, p < .001$)、「PAS_モニタリング」 ($r = .17, p < .05$) との間に有意な正の相関がみられた。一方で、「PAS_心理的統制」 ($r = -.27, p < .001$)、「ネガティブ発言」 ($r = -.28, p < .001$) との間には、有意な負の相関がみられた。

3. 3. 3. 家族の仲の良し悪しと「自己肯定感」との間の相関

「仲のよい家族」「仲のよくない家族」に纏わる各項目と「自己肯定感」との間の相関係数を算出した (Table 4、Table 5)。

「仲のよい家族の比率」と「自己肯定感」との間には有意な正の相関が見られ、($r = .16, p < .05$)、「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_祖父」と「自己肯定感」との間には有意傾向の負の相関が見られた ($r = -.27, p < .01$; $r = -.21, p < .05$)。

また、「仲のよい家族_父」、「仲のよい家族_母」と「自己肯定感」との間に、それぞれ有意な正の相関が見られた ($r = .19, p < .05$; $r = .23, p < .01$)。その他の変数については有意な相関は見られなかった。

3. 3. 4. 家族の仲の良し悪しと「自己肯定感」の各下位因子との間の相関

「仲のよい家族」「仲のよくない家族」に纏わる各項目と「自己肯定感」の3つの下位因子との間の相関係数を算出した (Table 4、Table 5)。

「自己肯定感」の下位因子「自尊心」と「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_父」、「仲のよい家族_母」との間に有意な正の相関が見られた ($r = .22, p < .01$; $r = .21, p < .01$; $r = .24, p < .01$)。さらに、「自己効力感」、「劣等感のなさ」と「仲のよい家族_母」との間、「劣等感のなさ」と「仲

のよい家族_妹」との間に有意な正の相関が確認された ($r = .24, p < .01$; $r = .19, p < .05$; $r = .19, p < .05$)。

また、「仲のよくない家族の比率」と「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」との間に有意な負の相関が見られ ($r = -.22, p < .05$; $r = -.24, p < .01$; $r = -.19, p < .05$)、「自尊心」と「仲のよくない家族_母」との間、「劣等感のなさ」と「仲のよくない家族_祖父」との間にそれぞれ有意な負の相関が確認された ($r = -.20, p < .05$; $r = -.24, p < .01$)。

3. 3. 5. 「ネガティブ発言」の6つの下位因子と「自己肯定感」の3つの下位因子の間の相関

「ネガティブ発言」の6つの下位因子と「自己肯定感」の3つの下位因子との間の相関係数を算出した (Table 6)。

「自己肯定感」と「存在否定発言」との間に有意な負の相関がみられた ($r = -.30, p < .05$)。また、下位因子間では、「自尊心」と「価値観否定発言」との間、「自己効力感」と「行動否定発言」、「存在否定発言」との間にそれぞれ有意な負の相関が確認された ($r = -.32, p < .05$; $r = -.34, p < .05$; $r = -.31, p < .05$)。

Table3 各因子間の相関分析

	自己肯定感	自尊心	自己効力感	劣等感のなさ	家族特性_円満	家族特性_情緒的結合	家族特性_共同活動	家族特性_規律	家族特性_自立	PAS	PAS_受容	PAS_心理的統制	PAS_モニタリング	ネガティブ発言
自己肯定感	—													
自尊心	.88 ***	—												
自己効力感	.85 ***	.65 ***	—											
劣等感のなさ	.66 ***	.45 ***	.39 ***	—										
家族特性	.43 ***	.36 ***	.38 ***	.33 ***	—									
家族特性_円満	.30 ***	.25 **	.25 **	.25 **	.90 ***	—								
家族特性_情緒的結合	.49 ***	.43 ***	.41 ***	.32 ***	.91 ***	.78 ***	—							
家族特性_共同活動	.27 ***	.19 *	.22 **	.26 **	.83 ***	.73 ***	.64 ***	—						
家族特性_規律	.36 ***	.28 ***	.38 ***	.28 ***	.74 ***	.54 ***	.63 ***	.61 ***	—					
家族特性_自立	.37 ***	.35 ***	.31 ***	.27 ***	.67 ***	.50 ***	.56 ***	.40 ***	.31 ***	—				
PAS	.37 ***	.28 ***	.32 ***	.35 ***	.68 ***	.65 ***	.53 ***	.41 ***	.44 ***	.44 ***	—			
PAS_受容	.46 ***	.39 ***	.37 ***	.36 ***	.71 ***	.64 ***	.73 ***	.50 ***	.48 ***	.84 ***	.84 ***	—		
PAS_心理的統制	-.18 *	-.08	-.14	-.27 ***	-.34 ***	-.38 ***	-.28 ***	-.25 **	-.05	-.38 ***	-.64 ***	-.30 ***	—	
PAS_モニタリング	.24 **	.20 **	.24 **	.17 *	.52 ***	.48 ***	.49 ***	.47 ***	.46 ***	.18 *	.77 ***	.63 ***	-.11	—
ネガティブ発言	-.37 ***	-.32 ***	-.29 ***	-.28 ***	-.47 ***	-.40 ***	-.50 ***	-.30 ***	-.21 **	-.46 ***	-.52 ***	-.51 ***	.47 ***	-.22 **

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 4 仲のよい家族と自己肯定感の相関分析

仲のよい家族 いない	仲のよい 家族 の数	仲のよい 家族 の比率	仲のよい 家族 祖父	仲のよい 家族 祖母	仲のよい 家族 父	仲のよい 家族 母	仲のよい 家族 兄	仲のよい 家族 姉	仲のよい 家族 弟	仲のよい 家族 妹	仲のよ い家族 その他	自己肯定感	自尊心	自己効 力感	劣等感 のなさ
仲のよい家族 いない	—														
仲のよい家族の数	-.21 **	—													
仲のよい家族の比率	-.16 *	.65 ***	—												
仲のよい家族_祖父	-.05	.54 ***	.45 ***	—											
仲のよい家族_祖母	-.06	.53 ***	.41 ***	.60 ***	—										
仲のよい家族_父	-.12	.66 ***	.46 ***	.23 **	.09	—									
仲のよい家族_母	-.23 **	.48 ***	.37 ***	.04	.09	.31 ***	—								
仲のよい家族_兄	-.04	.32 ***	.29 ***	.07	.17 *	.09	.12	—							
仲のよい家族_姉	-.06	.13	.03	-.08	-.08	.02	-.14	-.01	—						
仲のよい家族_弟	-.07	.32 ***	.09	.06	-.10	.17 *	.03	-.07	-.13	—					
仲のよい家族_妹	-.06	.36 ***	.10	-.02	.09	.16 *	.18 *	-.05	-.19 *	.00	—				
仲のよい家族_その他	-.01	-.09	-.04	-.03	-.05	-.09	-.16 *	-.03	-.04	-.05	-.04	—			
自己肯定感	-.12	.22 **	.16 *	-.04	-.02	.19 *	.23 **	.10	.11	-.01	.15	.04	—		
自尊心	-.14	.24 **	.22 **	.00	-.02	.21 **	.24 **	.07	.10	.03	.12	-.01	.88 ***	—	
自己効力感	-.09	.22 **	.13	.06	.08	.15	.24 **	.07	.02	.00	.10	.09	.85 ***	.65 ***	—
劣等感のなさ	-.12	.12	.08	-.09	-.08	.06	.19 *	.13	.10	-.08	.19 *	.06	.66 ***	.45 ***	.39 ***

注: * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 5 仲のよくない家族と自己肯定感の相関分析

	仲のよ くなく ない 家族 の数	仲のよ くなく ない 家族 の 比率	仲のよ くなく ない 家族 の 祖 父	仲のよ くなく ない 家族 の 祖 母	仲のよ くなく ない 家族 の 父	仲のよ くなく ない 家族 の 母	仲のよ くなく ない 家族 の 父	仲のよ くなく ない 家族 の 母	仲のよ くなく ない 家族 の 兄	仲のよ くなく ない 家族 の 姉	仲のよ くなく ない 家族 の 弟	仲のよ くなく ない 家族 の 妹	仲のよ くなく ない 家族 の 他	自己肯 定感	自尊心	自己効 力感	劣等感 のなさ
仲のよくない家族 いない	—																
仲のよくない家族の数	-.75 ***	—															
仲のよくない家族の比率	-.66 ***	.86 ***	—														
仲のよくない家族 祖父	-.21 *	.40 ***	.47 ***	—													
仲のよくない家族 祖母	-.24 **	.47 ***	.49 ***	.40 ***	—												
仲のよくない家族 父	-.50 ***	.62 ***	.56 ***	.06	.09	—											
仲のよくない家族 母	-.21 *	.26 **	.14	-.05	-.06	-.06	—										
仲のよくない家族 兄	-.26 **	.22 *	.23 **	-.06	-.07	-.06	-.06	.07	—								
仲のよくない家族 姉	-.22 *	.30 ***	.18 *	-.05	-.05	.13	-.05	-.05	-.05	—							
仲のよくない家族 弟	-.21 *	.31 ***	.20 *	-.05	-.05	-.05	-.05	-.06	-.03	-.03	-.05	—					
仲のよくない家族 妹	-.21 *	.16	.09	-.05	-.05	-.05	-.06	-.06	-.03	-.03	-.03	-.03	—				
仲のよくない家族 その他	-.12	.23 **	.11	.27 **	.23 **	.23 **	-.07	-.03	-.03	-.03	-.04	.02	-.08	—			
自己肯定感	.19 *	-.22 *	-.27 **	-.21 *	-.16	-.07	-.11	-.12	.01	.03	-.04	.04	.02	.88 ***	—		
自尊心	.13	-.17	-.22 *	-.11	-.07	-.07	-.07	-.20 *	-.02	.03	-.11	.04	.02	.85 ***	.65 ***	—	
自己効力感	.19 *	-.20 *	-.24 **	-.13	-.17	-.09	-.09	-.14	.07	-.03	.03	-.08	-.01	.85 ***	.45 ***	.39 ***	—
劣等感のなさ	.13	-.17	-.19 *	-.24 **	-.14	-.14	-.05	-.15	-.04	.02	-.01	.11	-.19 *	.66 ***	.45 ***	.39 ***	—

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 6 「自己肯定感」の3つの下位因子と「ネガティブ発言」の6つの下位因子の間の相関

	自己肯定感	自尊心	自己効力感	劣等感のなさ	行動否定発言	他者比較否定発言	人格否定発言	存在否定発言	価値観否定発言	統制的発言
自己肯定感	—									
自尊心	.88 ***	—								
自己効力感	.82 ***	.59 ***	—							
劣等感のなさ	.60 ***	.42 **	.31 *	—						
ネガティブ発言	-.19	-.22	-.28	.04	—					
行動否定発言	-.14	-.11	-.34 *	.09	.87 ***	—				
他者比較否定発言	-.09	-.21	-.13	.11	.88 ***	.75 ***	—			
人格否定発言	-.18	-.17	-.24	-.08	.89 ***	.72 ***	.85 ***	—		
存在否定発言	-.30 *	-.29	-.31 *	-.09	.85 ***	.65 ***	.66 ***	.63 ***	—	
価値観否定発言	-.27	-.32 *	-.20	-.14	.79 ***	.59 ***	.59 ***	.64 ***	.63 ***	—
統制的発言	-.05	-.07	-.21	.23	.84 ***	.68 ***	.69 ***	.62 ***	.59 ***	.67 ***

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3. 4. 重回帰分析による検討

家族関係、親の養育態度と自己肯定感との関係をさらに詳しく検討するため、「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」、「仲のよい家族」、「仲のよくない家族」とそれらの各下位因子を独立変数、「自己肯定感」とその3つの下位因子を従属変数とした重回帰分析を行った。

3. 4. 1. 「家族特性」「PAS」「ネガティブ発言」の各下位尺度を独立変数、「自己肯定感」の3つの下位因子を従属変数とした重回帰分析

「家族特性」「PAS」「ネガティブ発言」が、自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、「家族特性」の5つの下位尺度、「PAS」の3つの下位尺度、「ネガティブ発言」をそれぞれ独立変数、「自己肯定感」の3つの下位尺度をそれぞれ従属変数として、重回帰分析を行なった。

「家族特性」においては、「家族特性_情緒的結合」、「家族特性_自立」が「自尊心」に対して有意な正の効果を有していた($\beta = .51, p < .001$; $\beta = .20, p < .05$)。(Table7) また、「家族特性_情緒的結合」、「家族特性_規律」が「自己効力感」に対して有意な正の効果を有していた($\beta = .39, p < .01$; $\beta = .24, p < .05$)。さらに、有意傾向ではあるが、「家族特性_自立」が「自己効力感」に対して正の効果を有していた($\beta = .16, p < .10$)

(Table8) 「劣等感のなさ」に対しては有意な影響は確認できなかった。また、いずれの結果にも性差はほとんど見られなかった。(Table9)

「PAS」においては、「PAS_受容」が「自尊心」、「自己効力感」、「劣等感のなさ」に有意な正の効果を有していた($\beta = .47, p < .001$; $\beta = .38, p < .001$; $\beta = .36, p < .001$)。また、「劣等感のなさ」に対しては、「PAS_心理的統制」が有意な負の影響を与えていることもわかった($\beta = -.16, p < .05$)。(Table10～Table12)

次に、「ネガティブ発言」においては、「自尊心」、「自己効力感」、「劣等感のなさ」が有意な負の効

果を有していた($\beta = -.32, p < .001$; $\beta = -.29, p < .001$; $\beta = -.28, p < .001$) (Table13～Table15)。

Table7 「家族特性」の各下位因子を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
家族特性_円満	-.22	.105
家族特性_情緒的結合	.51	< .001
家族特性_共同活動	-.11	.344
家族特性_規律	.07	.507
家族特性_自立	.20	.029

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table8 「家族特性」の各下位因子を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		.001
家族特性_円満	-.20	.125
家族特性_情緒的結合	.39	.003
家族特性_共同活動	-.11	.359
家族特性_規律	.24	.016
家族特性_自立	.16	.068

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table9 「家族特性」の各下位因子を独立変数、「劣等感」のなさを従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
家族特性_円満	-.09	.504
家族特性_情緒的結合	.19	.168
家族特性_共同活動	.07	.548
家族特性_規律	.10	.330
家族特性_自立	.15	.118

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table10 「PAS」の各下位因子を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
PAS_受容	.47	< .001
PAS_心理的統制	.06	.422
PAS_モニタリング	-.10	.296

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table11 「PAS」の各下位因子を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
PAS_受容	.38	< .001
PAS_心理的統制	-.01	.863
PAS_モニタリング	-.02	.819

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table12 「PAS」の各下位因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
PAS_受容	.36	< .001
PAS_心理的統制	-.16	.040
PAS_モニタリング	-.08	.414

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table13 「ネガティブ発言」の各下位因子を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
ネガティブ発言	-.32	< .001

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table14 「ネガティブ発言」の各下位因子を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
ネガティブ発言	-.29	< .001

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table15 「ネガティブ発言」の各下位因子を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析
モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化 推定値	<i>p</i>
切片		< .001
ネガティブ発言	-.28	< .001

注. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3. 4. 2. 「仲のよい/よくない家族_母」、「仲のよい/よくない家族の比率」を独立変数、「自己肯定感」の3つの下位因子を従属変数とした重回帰分析

相関分析において関連性が見られた、「仲のよい家族の比率」「仲のよくない家族の比率」「仲のよくない家族_母」「仲のよい家族_母」が「自己肯定感」の3つの下位因子に与える影響を詳細に検討するため重回帰分析を行った。(Table16～Table23)

「自己肯定感」に対して、「仲のよい家族_母」が有意な正の影響、「仲のよくない家族の比率」が有意な負の影響を及ぼしていた($\beta = .20, p < .05$; $\beta = -.26, p < .01$)。

「自己肯定感」の下位因子に関しては、「仲のよい家族の比率」が有意傾向ではあるが、「自尊心」

に対して正の影響を与え($\beta = .15, p < .10$)、「仲のよい家族_母」が、「自尊心」、「自己効力感」、「劣等化のなさ」にそれぞれ有意な正の効果を有していた($\beta = .19, p < .05$; $\beta = .22, p < .01$; $\beta = .18, p < .05$)。

一方で、「仲のよくない家族の比率」が「自尊心」、「自己効力感」にそれぞれに有意な負の影響を及ぼしており($\beta = -.20, p < .05$; $\beta = -.22, p < .05$)、有意傾向ではあるが、「劣等感のなさ」に対しても負の影響を及ぼしていることが確認された($\beta = -.17, p < .10$)。

また、「仲のよくない家族_母」においては、「自尊心」に対し、有意な負の影響を及ぼしていることがわかった($\beta = -.17, p < .05$)。

Table16 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよい家族の比率	.09	.308
仲のよい家族_母	.20	.016

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table17 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよい家族の比率	.15	.075
仲のよい家族_母	.19	.024

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table18 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよい家族の比率	.04	.592
仲のよい家族_母	.22	.008

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table19 「仲のよい家族の比率」、「仲のよい家族_母」を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよい家族の比率	.02	.843
仲のよい家族_母	.18	.031

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table20 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自己肯定感」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 自己肯定感

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよくない家族の比率	-.26	.004
仲のよくない家族_母	-.08	.342

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table21 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自尊心」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 自尊心

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよくない家族の比率	-.20	.023
仲のよくない家族_母	-.17	.048

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table22 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「自己効力感」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 自己効力感

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよくない家族の比率	-.22	.013
仲のよくない家族_母	-.11	.203

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table23 「仲のよくない家族の比率」、「仲のよくない家族_母」を独立変数、「劣等感のなさ」を従属変数とした重回帰分析

モデル係数 - 劣等感のなさ

予測変数	標準化推定値	p
切片	< .001	
仲のよくない家族の比率	-.17	.060
仲のよくない家族_母	-.12	.167

注. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4. 考察

4. 1. 因子分析

各尺度の基礎統計量と内的一貫性を確認するために、各尺度の基礎統計量と信頼性係数の算出を行った。基礎統計量については、いずれの変数についても天井効果と床効果は確認されなかった。また、各尺度・各項目のSDは1.00を超えるものが多

かった。 α 係数については、「劣等感のなさ」において $\alpha = .69$ であり、数値がやや低かったが、その他の変数においては $\alpha s = .78 - .85$ で良好であった。「劣等感のなさ」の α 係数については、今回の因子分析が初期段階での探索的に行ったものであるということやサンプル数を加味し、内的一貫性を担保できると判断した。

4. 2. 相関分析

「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」、「仲のよい家族」と「仲のよくない家族」の各変数との関連を検討するため各因子、下位因子間の相関分析を行った。

4. 2. 1. 「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」の各下位因子、「ネガティブ発言」との間の相関

「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」の各下位因子、「ネガティブ発言」の間の相関係数を算出した。結果、「自己肯定感」と「家族特性」、「PAS」の各下位因子、「ネガティブ発言」との間にすべて有意な相関が確認され、「PAS」の下位因子「心理的統制」と「ネガティブ発言」との間のみ負の相関があることがわかった。

「家族特性」は家庭環境としての性質であり、その性質として、個人を取り巻く環境として家庭内のルールが機能していたり、情緒的な繋がりやコミュニケーションが豊かで、一緒に行動する機会が多い一方で、お互いが依存しすぎず自立的であることが、自己肯定感の高さと関係していることが示唆された。

「PAS」は親の養育態度であり、養育態度が子に対して受容的であり、親が子どもの行動などを理解、把握していることが自己肯定感を支える一方で、親が子に対して期待しすぎ、思い通りにしようとするような態度、さらには家庭内で否定的な言葉が飛び交うような環境が自己肯定感を低下させる可能性が示唆された。

4. 2. 2. 「自己肯定感」の下位因子と「家族特性」、「PAS」の各下位因子、「ネガティブ発言」との間の相関

「自己肯定感」の下位因子「自尊心」「自己効力感」「劣等感のなさ」それぞれと「家族特性」、「PAS」、「ネガティブ発言」の各下位因子との関連を検討するため各下位因子間の相関分析を行った。結果、親、養育者の否定的な言葉が自己肯定感の低下と関連

することが確認された一方で、家庭環境の良さや、家族が受容的であり、また理解しようとする積極的な関わりが、自分の存在価値の認知や自分に対する自信や満足感と関連することが示唆された。家族がそれぞれを認めお互いを大切に扱うことが、自分自身もまた大切な存在であると感じられ、またそれぞれが家庭内の役割を担うことで役に立っている感覚や自信につながり、他人と比較せず自分らしさをもてるものと考えられる。

また、親が子を統制しようとする養育態度は、自己肯定感を構成する下位因子「自尊心」、「自己効力感」との関連は確認できなかったが、唯一「劣等感のなさ」に関して有意な負の相関が確認された。親や養育者が自身の価値観を押し付けるような態度があっても、子ども自身の存在価値や自己愛とは直接的な関係があるわけではないが、親の価値観が強く影響すると、子自身の価値観が弱くなり、自分らしさや自身の価値観による成功体験が蔑ろにされ、自分の考えが間違っているような感覚として劣等感を感じやすいのではないかと考えられる。

4. 2. 3. 家族の仲の良し悪しと「自己肯定感」との間の相関

「仲のよい家族」「仲のよくない家族」に纏わる各項目と「自己肯定感」の3つの下位因子「自尊心」、「自己効力感」、「劣等感のなさ」との間の相関係数を算出した。結果、母と仲が良いと感じていることと、自分の存在価値や自分に対する自信や満足感、劣等感の低下とが関連し、自己肯定感全般の高まりを支えていることが示唆された。また、家族に仲が良い家族が多いことと父親と仲が良いことが自分の存在価値の認識と関連していることがわかった。仲のよい家族が多いと安心感や努力や成果を認めるようなポジティブな関わりが多くなり、子どもが自分の存在価値を見出しやすくなり、自分は自分であって良い、いわゆる自分らしさを感じやすく自己肯定感が高くなると推察できる。

一方で、仲のよくない家族が多いことが自己肯定

感全般を低下させ、母と仲が良くないと認識していると自身の存在価値を捉えにくく、祖父と仲が良くない場合、他人と比べたり、自分らしさを捉えにくいことがわかった。祖父との関係に関しては、管見では先行研究において孫との関係や自己肯定感との関係を扱ったものが見当たらず、唯一、森下・上田 (2016) が祖父母の関係が孫の自尊感情や自己受容に与える影響について検討し、その影響は明らかになってはいないが、「現在」同居の場合にのみ理解共感と心の支えが影響している可能性を見出し、その重要性について示唆を与えている。今後詳しい検討が見込まれる。

4. 2. 4. 「ネガティブ発言」の6つの下位因子と「自己肯定感」の3つの下位因子の間の相関

「ネガティブ発言」の6つの下位因子と「自己肯定感」の3つの下位因子との間の相関係数を算出した。ネガティブ発言の6つの下位因子は、「行動否定発言」「他者比較否定発言」「人格否定発言」「存在否定発言」「価値観否定発言」「統制的発言」であった。

結果として、行動を否定するような発言と存在を否定するような発言が自信や役に立っている感覚との間に関連があり、価値観を否定するような発言が自己愛や自信の存在価値と関連することが明らかになった。その他、他者と比較して子どもを否定するような発言、人格を否定するような発言、親が子どもをコントロールするような発言は自己肯定感と直接の関係は見られなかった。

これらのことから、直接間接問わず、抽象的な発言より、子どもが大事にしている考え方や、そこから表出された行動に対する否定や、親を悲しませる、残念がらせたと捉えることができる発言によって自己肯定感が低下することが示唆された。

4. 3. 重回帰分析

4. 3. 1. 「家族特性」「PAS」「ネガティブ発言」の各下位因子を独立変数、「自己肯定感」の下位因子を従属変数とした重回帰分析

「家族特性」「PAS」「ネガティブ発言」が、自己肯定感に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った。

「家族特性」においては、「情緒的結合」と「自立」が「自尊心」に、「情緒的結合」と「規律」が「自己効力感」に有意な正の効果を有しており、「劣等感のなさ」に対しては有意な影響は確認できなかった。

このことから、家族がそれぞれ自立しており、また情緒的なつながりが強いことが子どもの存在価値の認知や自信に直接影響を与えることが示唆された。また、情緒的なつながりが強く、家族の結束力が強かったり、家族一人ひとりの自立性が高いことが、自分らしさに直接影響を及ぼしていることが示唆された。次に、家族の結束力が強い場合、子どもの自己効力感が高いことが示されており、家族の結束力が強い家庭環境が子どもの自信や他人の役に立っている感覚を育む可能性が示唆された。

次に、「PAS」においては、「受容」が「自尊心」、「自己効力感」、「劣等感のなさ」に有意な正の効果、また「心理的統制」が「劣等感のなさ」に負の影響を与えていることがわかった。このことから、親が受容的である場合、子どもの存在価値の認知や自信、役に立っているという感覚を高め、自分らしくいられる可能性が示唆された。また、親から子どもへ心理的な束縛が強いと劣等感を感じやすくなるといったことが示されており、親が子どもに指図するといった価値観を押し付けるような関わりが、自分の価値観への疑いをもたせ、他者との比較意識を強くし自分らしさを薄める可能性が示唆された。

最後に、「ネガティブ発言」においては、「自尊心」、「自己効力感」、「劣等感のなさ」すべてに有意な正の効果を与えていた。家庭内で親や養育者

のネガティブな発言を子どもが認知していると、自尊心や自己効力感を低下させ、劣等感を感じやすくさせることわかった。

4. 3. 2. 「仲のよい/よくない家族_母」、「仲のよい/よくない家族の比率」を独立変数、「自己肯定感」の3つの下位因子を従属変数とした重回帰分析

相関分析において自己肯定感と有意な相関が見出された「仲のよい/よくない家族_母」と「仲のよい/よくない家族の比率」が、「自己肯定感」の下位因子に与える影響を詳細に検討するため、重回帰分析を行った。

結果として、母親と仲が良いと、子どもの存在価値の認知や自信、役に立っているという感覚を高め、自分らしくいられる可能性が示唆された。一方で、母親と仲が良くないと、子どもの存在価値の認知が低くなることが明らかになった。

また、仲のよい家族の数が少ないと子どもの存在価値の認知や自信、役に立っているという感覚を低下させ、自分らしさが育まれないことが示された一方で、有意傾向ではあるが、仲のよい家族が多いと、子どもの存在価値の認知を高める可能性が示唆された。

このことから、母親は家族の中でも自己肯定感と最も密接な関係にあり、家庭の雰囲気をも最も左右する存在であることが推察された。これについては、飛田・狩谷（1989）が、女子短期大学生の父親との関係の特徴と母親との関係の特徴を比較検討した結果、父親との関係よりも、母親との関係に対してより満足し、父親よりも母親に対してよりコミュニケーションや共行動を多くとっていることを明らかにし、母親との関係の濃さを示唆したものと一致している。一方で、家族の中の誰が、といったことではなく、単純に家族の中に仲の良い家族が多くいることが自己肯定感を低下させ、仲の良い家族が多くても自己肯定感に直接影響を及ぼさないことから、家族間で仲が良いと認識する必要はなくと

も、仲が悪いと感じないような関係性であることが子どもの自己肯定感においては重要であることがわかった。

5. 総合考察

本研究の目的は、自己肯定感を「自己の否定的な側面も含め肯定しており、ありのままの自分を受け止め、自分はこの世の中で役に立っている、自分が自分であっても大丈夫、という感覚」と定義し、家族特性、養育態度、ネガティブ発言に着目し、大学生における家族との関係が自己肯定感に与える影響を明らかにすることであった。

相関分析においては、自己肯定感と家族特性、養育態度、ネガティブ発言との間に有意な相関が確認され、家族の仲の良さに関しては、特に母親の存在が重要であることが示唆された。また、重回帰分析において、家族になんでも相談できたり、言葉で伝えなくても想いが通じるような情緒的な繋がりや受容的な関わりが自分の存在価値や自信、自分らしさを支え、逆にネガティブな発言が飛び交う環境が自己肯定感を全般的に低下させることに加え、親や養育者が自分の価値観から思い通りに「しつけ」をしてしまうことが子どもの自分らしさを削いでしまうことが明らかとなった。

家族間の仲の良さと自己肯定感との関係に関して、母親との仲の良さが子ども自身の存在価値の認知や自信、自分らしさを支えていることがわかったが、こども家庭庁（2023）の調査で、「あなたは、悩みや心配ごとがあった場合、だれに相談したいと思いますか。」の質問に対し、「母（義理の母や、事実婚のパートナーの母を含む）」（55.2%）が最も高く、次いで、「近所や学校の友だち」（33.1%）、「父（義理の父や、事実婚のパートナーの父を含む）」（26.7%）、「きょうだい」（17.3%）、「だれにも相談しない」（11.2%）という結果を示しており、やはり子どもにとって母親は家庭の中で重要な役割を担っていることがわかる。一方で、学童期から青年期の発達を通じて、重要な

る対象が友人等家庭外の対人関係に移行していくとしても、やはりその基盤となる家族の存在は大きく、父親や兄弟の役割も軽視することはできない。

そもそも、母親が子どもの成長や発達において「最も」重要な役割を担い、母親の愛情が子どもの成長に欠かせないといった考え方が古くは存在し、科学が発展した現在でも未だ払拭されていないのではないかと考えられる。愛着理論を提唱したボウルビイ（John Bowlby）も決して愛着関係を母子間に限定はしていない。また、ジークムント・フロイトが提唱する発達理論においては、エディプス・コンプレックスとして説明されているように、母親同様に父親が子どもの発達に重要な役割を果たしていることを示している。ボウルビイが愛着研究の前段階で提唱した「マターナル・ディプリベーション」、つまり「母性剥奪」の概念は乳幼児期における特定の母親的な存在による養育の欠如による心身発達の影響として知られている。ここで重要なのは、子どもにとって必要なのは、母親そのものの存在というよりは母親的存在であり、母ではなく母性であると考えられる。

本調査において、得られた結果としては、自己肯定感、つまり、「自己の否定的な側面も含め肯定しており、ありのままの自分を受け止め、自分はこの世の中で役に立っている、自分が自分であっても大丈夫、という感覚」を高めるために必要な要素として、主に家族間の関係として、言語非言語問わず家族間の理解あるコミュニケーションがあり、ある程度の規律とそれぞれが自立的であること、また養育態度として受容的であることが明らかとなり、それに加え母親との仲の良さが示された。以上のことを包括的に考慮すると、「共感」に近い子どもに対する理解の態度、必要なときに得られる情緒的サポート、受容的関わりといった部分が自己肯定感に影響を与え、それら母性的な機能ともいえる要素をもちやすい母親がそれを担っていることが多いということが示されたといえる。換言すると、それらの要素を持っていれば他の家族による関わりが子ども

の自己肯定感を支えるという可能性も否定できないということになるだろう。相関分析によって、仲のよい妹や仲のよくない祖父の存在が自己肯定感の一部との間に有意な相関が見られたことを考慮し、さらなる調査が見込まれる。

引用文献

- 伊藤美奈子 (2019). 自尊感情・自己肯定感に関する実践研究-教育臨床の立場から. 日本教育心理学会公開シンポジウム. 教育心理学年報 58 巻. p. 351-362 (p. 359-360)
- 郭芳・田中弘美・任セア・シマイ (2018). 子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究: 京都子ども調査をもとに (Doctoral dissertation, Doshisha University).
- こども家庭庁 (2023). 我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査 Retrieved from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/d0d674d3-bf0a-4552-847c-e9af2c596d4e/3b48b9f7/20240620_policies_kodomo-research_02.pdf (January, 2025)
- 久芳 美恵子・齊藤 真沙美・小林 正幸 (2007). 小, 中, 高校生の自己肯定感に関する研究 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 42, 51-60.
- 杭瀬 智子・三澤 咲美 (2003). 日本における家族特性評価尺度の作成 臨床死生学年報, 8, 30-49.
- 文部科学省 (2017). 自己肯定感を高め, 自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた, 学校, 家庭, 地域の教育力の向上 (第十次提言) Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afielddfile/2017/06/27/1387211_07_1.pdf (January 12, 2025)
- 文部科学省 (2017). 自己肯定感を高め, 自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた, 学校, 家庭, 地域の教育力の向上 (第十次提言) 参考資料2 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo14/shiryo/_icsFiles/afielddfile/2017/07/11/1388011_11_1.pdf (January 12, 2025)
- 野澤朋未・浅井継悟. (2023). 児童の認知する養育者の身内卑下呈示と自己の強みへの注目との関連. 日本教育工学会論文誌, 47(1), 171-179.
- 森下正康・上田佳乃. (2016). 祖父母との関係が女子大学生の自尊感情と自己受容に与える影響. 京都女子大学発達教育学部紀要, 第 12 号 (2016-02-10)
- 尾形和男・増南太志 (2021). 青年の自己有能感形成に及ぼす要因の検討: 両親の養育態度 (PBI) と自尊感情・他者軽視との関連. 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇, 21, 107-114.
- 高垣 忠一郎 (2009). 私の心理臨床実践と「自己肯定感」. 『立命館産業社会論集』. 第45巻第1号
- 田名場美雪・佐々木大輔・佐藤清子 (2000). 青年期における基本的信頼感と対人関係. 弘前大学保健管理概要, (21), 11-15.
- 天貝由美子. (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43(4), 364-371.
- 飛田操・狩谷佳子. (1989, June). C-10 両親の「仲の良さ」の認知と親子関係の関連について (社会 C). In 日本教育心理学会総会発表論文集 第31回総会発表論文集 (p. 284). 一般社団法人日本教育心理学会.
- 吉田美波 (2022). 親の「褒め」・「叱り」・「見守り」が子どもの内的作業モデル及び自尊感情に与える影響について. 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, (18), 55-70.
- 内海緒香 (2013). 青年期養育尺度 (PAS) の作成. 心理学研究, 84(3), 238-246.